

# 愚か者の純愛

Missing You...

早瀬響子



Story **Kyouko Hayase** + Illustration **Hasuno Mizuki**



愚か者の純愛

《立読み版》

早瀬 響子

イラスト 水貴 はすの

「……すまない、亮りょう。どうか、お金を貸してほしい……」

市原亮いちばらは、自分が経営する会社の床にほっそりした身体を這いつくばらせ、声をふり絞っているかつての親友——仁科透哉にしなとおやを、立ちつくしたまま机こしに見下ろしていた。すでに夜の八時をすぎたオフィスには、他にもう誰もいない。

——いまさら、一体何を言っているのだ！ 四年前のあの日、お前は最悪なやり方で俺おぼを拒こぼんだくせに！——

十八歳の時の、苦い記憶が亮の脳裏によみがえった。そのややあごの張った、精悍せいかんな面差おもてしにはなんの表情も浮かんでいなかったが、仕立てのよい、チャコールグレーのスーツに包まれた遅たくましい身体は、怒りのあまり燃えるようだった。

切れ長な淡い茶色の、今のようきざしやに感情が高ぶった時はかすかに緑がかって見える瞳で、透哉をにらみ据える。小刻みに震えるその華奢みやしやな背中を、そのまま思いきり踏みにじつてやりたい。

「……なんで俺に、そんなことを頼む？」

けれど内心とは裏腹に、亮は自分でも驚くほど冷ややかな、軽蔑に満ちた声を投げつけていた。それへ透哉がびくりとし、おずおずと顔を上げた。そのまま二人の視線がぶつかる。

——一瞬、亮は息をのんだ。

はっとするほど綺麗な、澄んだ瞳がこちらを見つめた。まわりの白い部分が青みがかって見えるくらいに黒くて大きな、吸い込まれそうな瞳だ。あの時とーいや、初めて会った時と同じだった。

「……！」

次の瞬間、亮は目をそらしてしまっていた。何故かその瞳を見てはいけなと思った。そしてほんの少し前、全く同じことをしていたのに気がついた。初めて透哉がこのオフィスに入ってきた時にも、彼と目を合わせる事が出来なかったのだ。

思わずカッとなった。よりによってこいつにそんなことを感じるとは。どんな時でも強気の姿勢が方針で、今まですべてそれで成功してきたというのに。

亮は心を落ちつける為、ゆっくりと深く息を吸い、再び透哉を見下ろして表情を変えずに言った。「聞こえなかったのか」

「あっ……」

何故か、透哉の方もかすかに頬を染めて呆然とこちらを見ていた。はっとしたように目を見はり、それからさらに真っ赤になって、あわてて口を開いた。

「僕の父さんが……今、ガンで入院しているんだ……」

その父さん、という言葉に、亮はさらに怒りがこみ上げるのを感じた。それがわずかに表情に出たのか、透哉はおびえたように身をすくめたが、懸命に続けた。床についた細い両手が固く握りしめられる。「一度治ったんだけど、二年前に再発して……主治医の先生にも、このままじゃ絶対に助からないって言われている。だけど、もう一度手術をすれば、わずかだけでも望みはあるそうなんだ。だからどうしてもそれを受けさせたいのだけれど……その為のお金が足りないんだ」

床についた透哉の細い両手が固く握りしめられた。そのまま、まるで亮に罵られるのを待つかのようのしに、いったん口をつぐむ。けれど亮が何も言わないので、唾をのみ込み、震える声で言葉を継いだ。「貯金も保険も、最初の治療でほとんど使ってしまったし……経営していた事務所も土地も処分したんだけれど……赤字になってしまった。……それに、再発までの時間が短かったから、治療に有利な保険にかけ直しも出来なくて……。だから僕が大学を辞めて、就職して……本当はいけないのだけれど、他に幾つかバイトもかけもちして、借金できるところからは全部して、少しずつ返しなげらなんとかやって来たん

だ。でも三日前に就職先が倒産してしまって、そっちでの借金もすぐ返さないといけなくなった…」

透哉は必死な仕草で、もう一度、その白い額を床にこすりつけた。

「すまない！ 僕が君にこんなことを頼むなんて、本当に最低だってことはよくわかってる。言える立場じゃないってことも……。だけど他に、もうどうしても方法が見つからなかった。もちろんすぐ返済する。利息は自由に決めてほしいし、期日も出来る限り君の条件に従うよ。こんな状況でまだ見つかっていないけれど、次の就職先も探しているし、バイトも幾つかしているから。だからどうしても今、手術代とその為の治療費の分だけ……百万だけ、貸してほしい……」

「——なるほど。それで一番金を持ってそうな俺のところに、のこのこ来たわけか」

低い声でそう言うと、亮はゆっくりと机を回って透哉に近寄った。はらわたが煮えくりかえるようだった。こんな気持ちになったのはあの日以来だ。しかも、そうさせたのは全く同じ人間だった。

「大した度胸じゃないか！ いまさら、お前の親父を助ける金をよこせだと!」

怒りがさつきの戸惑いを忘れさせた。ぎよつとしてもう一度顔を上げた透哉の髪を、その大きな手をつかみ、引きずり起こした。そのままぐいと仰向かせる。同い年の二十二歳の筈だが、百九十センチを超える長身で精悍な身体つきの亮と、華奢な透哉とは身長差が十センチ以上もあるので、まるでのしか

かるような格好になった。

「……っ！」

だが、近々とその顔をのぞき込んだとたん、亮は思わず息をのんでしまった。透哉は震えながらこちらを見ている。





憔悴<sup>しやうすい</sup>し、苦痛と疲労がにじんだ顔。もともと細身の筈だが、以前よりはつきりと瘦<sup>や</sup>せた身体。ごごのつばりはしているが、かなり着古した白いシャツと地味なグレーのスーツ。透哉の今の生活が経済的にも肉体的にも苦しいのは、一目見てすぐにわかった。けれどその為に、すさんだという雰囲気は全くなかった。

高く通った鼻梁<sup>びりょう</sup>と、わずかに開いて震える形のよい唇、白くきめ細かな肌や、それに今、自分がわしづかみにしている漆黒のつややかな髪も、年齢<sup>かき</sup>を重ねた以外はあの頃のままに見える。むしろ心労<sup>ただよ</sup>の為か、もともとの秀麗<sup>しゅうれい</sup>な優しい顔立ちに、以前にはない痛々しいような、愁<sup>うれ</sup>いをおびた色気が漂<sup>ただよ</sup>っていて、亮はつい、引き寄せられるように彼を見つめていた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

愚か者の純愛

《立読み版》

発行日 2011年10月28日

著者名 早瀬 響子

イラスト 水貴 はすの

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Kyoko Hayase 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。